



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	音楽科（各教科・領域の研究）(fulltext)
Author(s)	原口,直
Citation	研究紀要：東京学芸大学附属世田谷中学校研究年報, 2015: 109-115
Issue Date	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/147654
Publisher	東京学芸大学附属世田谷中学校
Rights	

2. 5 音楽科

原口 直

1. 研究主題

「表現力を高め、社会や文化とのかかわりに活用できる生徒の育成」

2. 研究主題について

本校の研究テーマである「世田谷中学校で育てる『21世紀型能力』 - 各教科で支える力と3つの学習形態」において、音楽科では「表現力を高め、社会や文化とのかかわりに活用できる生徒の育成」に焦点を当てた。

「21世紀型能力」の提案の中で、音楽科が育む力は主に下の3点であると考えた。

- ①中核となる思考力
- ②それを支える基礎力
- ③使い方を方向づける実践力

②基礎力は日々の授業や中学校以前から培ってきた表現のために必要な能力である。すでにもっている基礎力の中から何をどう使うか考えたり、能力の不足があった場合どのように補うのか考えたりするのが①思考力であり、それを実際に活用することが③実践力となる。これらの3つの力は関わりあっている。

音楽科にとって高めたい表現力は特に②基礎力と①思考力に関わりがある。歌唱における表現とは、読譜をし、歌詞を理解し、音楽を形づくっている要素を理解し、作者の意図を理解したうえで、自分の持っている技術や能力を活かしたり、さらに付け加えたりして相手に伝えることのできる力であると考えられる。また、鑑賞の表現として得た知識から自分の意見をまとめ、社会や文化につなげ相手に伝えるという力も求める。つまり、単に音での表現だけでなく音楽を通して社会や文化とのつながりを考え、話すことや書くことで表現をする必要がある。とかく、音楽科での表現というと歌唱や器楽、創作といった音で表現することに偏りがちだが、音楽科でも言葉での表現を取り入れたいと考えている。

さらに、「21世紀型能力」の提案の中で音楽科の指導目標や内容について、

- ①音楽活動の基礎的な能力
- ②コミュニケーションを図る指導
- ③音や音楽と生活や社会とのかかわりを実感できるような指導

と具体的な指導が明記されている。

3. 授業展開の例

ここでは、歌唱と鑑賞の2つに分け、それぞれが表現力を高めていることと社会や文化にどのようにかかわりを持っているかを紹介したい。

(1) 歌唱

歌唱における②基礎力は大きく2つあり、楽譜を読むために必要な知識（ソフト）と表現に必要な

体（ハード）である。この②基礎力をつけるために必要なのが①思考力であり、これは自分がめざす表現をするために、この知識や技術が足りないのかを発見し、それをつけるためにどのようにすればよいのか考える力のことを指す。

①知識の基礎力

まずは音符や休符、記号を覚える読譜力をつける活動である。音楽には様々なルールがあり、1年生の教科書に載っているものは音符と休符で16種類ある。記号では音高の変化、音の強弱、反復、速度、演奏の仕方、その他の楽語で掲載数は50を超える。それ以外にト音記号やヘ音記号、階名（ドレミ…）など②基礎力をつけるために、始めに覚えることが多く存在する。漢字や英単語を覚えるような基礎的な活動ではあるが、のちに表現する時の効率をよくし、思考したことを反映させるためにはなくてはならないことと位置付けている。これは1学年のはじめに重点的に行い、3学年通じて授業内でくりかえし使っている。加えて、拍子や速度といった楽譜から得られる情報を単元の始めに毎回必ず確認している。

さらに、音楽を形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成など）を聴きとれるようにするため、ほぼ毎回の授業の冒頭にジャンルの異なる音楽を聴かせて、音楽の何に耳を傾ければ良いか、それをどのように言葉に表現すれば良いかを学んでいる。音を言葉に表すことで、音楽のちがいや自らの好みを明確にし、他人に伝えることができるようになり、この力がのちの思考に役立つ。

また、欠かせないのは作者への意識である。自分が表現することを思考する際に、まず作者がどのようなことを表現しようとしているのか理解することが第一歩となる。その中には時代背景や歌詞等も含まれる。

②体の基礎力

取り入れているのは発声練習である。姿勢や視線を意識し、喉・肺・腹部を目的を明確にして動かす。すぐに身に付くものではなく、すぐに役立ったと感じられるものではないかもしれないが、のちに表現の幅を広げる上で欠かせない基礎力である。こちらは1年生で重点的におこない、2・3年生では歌唱曲の内容に応じて、適宜おこなっている。

③基礎力を活かした思考力

以上2つの②基礎力と①思考力は密接に関わり、さらにそこに③実践力を加え、表現を高め合っている。

独唱の場合、この曲でこういった表現をしたいと[表現のための第一の思考]をする。知識が足りず自分の目指す表現ができないと感じた時に「どのような力が足りないのか」それを身につけるために「どのような方法があるのか」を[基礎力のための第二の思考]を持って考える。それを表現に結びつけるために実践を重ねる。歌唱『赤とんぼ』を例にとると下記のようなになる。

実践 歌唱『赤とんぼ』

[表現のための第一の思考]

歌詞に出てくる人物の気持ちを知って歌いたい。

[基礎力のための第二の思考]

作詞者が夕焼けに飛ぶ赤とんぼを、姐や（子守娘）と一緒に見た感情を知るためにはどうすれば良いか。

[基礎力のための第一の実践]

- ・作者の描いた土地や季節について調べる。
- ・写真を探す。
- ・生活や文化、時代背景を調べる。

[表現のための第二の実践]

「お里の便りも絶え果てた」の終わり方の強弱を工夫する。

また、独唱での個人の表現と、合唱での集団での表現はさらにちがいがあある。集団で表現をするためには、個々の表現を一つにまとめたり、精査したり、ある一人の表現に寄せたりと、さらに高度な①思考力が必要となる。その際に、もともと持っている②基礎力の差が出る。

(2) 鑑賞

鑑賞における②基礎力は歌唱と重なる部分がある。前述した、音楽を形づくっている要素を聴きとる、作者への意識は歌唱と同じく必要な力である。また、2年生『交響曲第5番ハ短調』1年生『魔王』などの西洋音楽の鑑賞教材では歌唱と同じように読譜の基礎力が不可欠になる。

それを踏まえた上で、鑑賞では社会や文化とのかかわりをより色濃く出して指導をしている。それは授業で習ったことを、授業と考査でしか生かす場がないのは「21世紀型能力」が求める「生きる力」につながっているとは言い難いからだと考える。社会や文化と結びつける①思考力を養ってはじめて鑑賞の授業が成功したと言えよう。

4. カリキュラムの例

実践①

『交響曲第5番ハ短調』（ベートーヴェン作曲）

「コンサートのチケットが手に入りました。どのような準備をしていきますか？」

コンサートに行く時に作曲家や時代背景などの②基礎力を培うだけでなく、曲の構成や形式を①思考することでより深く鑑賞ができるようにする。

[社会や文化とのかかわり]

企業や財団などが芸術文化を支える社会体制を知り、生活の中で音楽鑑賞をする文化を知る。

実践②

『日本の郷土芸能』『世界の諸民族の音楽』（エイサー、阿波踊り、ウズンハワ、京劇など）

「外国の方に『日本の音楽を教えてください』と言われたら何と説明しますか？」

音楽の特徴をつかむだけでなく、他人に説明する事を前提として比較したり、言葉を選んだりする。

[社会や文化とのかかわり]

国際社会において我が国の文化を説明したり、世界の音楽についての知識や理解を深めたりする。

実践③

『文楽「菅原伝授手習鑑」より』

「鑑賞した後、大阪市が文楽協会への補助金廃止を提案したことについて知り、文楽の存続を考える。」

芸能の特徴を知った上で、芸能をつなげる難しさや意義と地方財政とを結び付けて考える。

[社会や文化とのかかわり]

芸術文化を支える国や地方自治体で起きている問題を知る。生活の中で文楽を鑑賞しなければ関係

のない事ではなく、納めている税金がどのように使われているのか関心を持つ。

実践④

『ラブドール・レトリバー』（AKB48）他

「AKB48 は、いくらもらっているのか？」

CDを販売するために関わる様々な職種の人々の働きを知った上で、その生活を守ることを考える。

[社会や文化とのかかわり]

音楽制作に携わる人々を守る上で欠かせない著作権に触れ、現在起きている問題やこれから起こりうる問題を考える。

5. 公開授業における提案

今年度の公開研究会では上記の歌唱と鑑賞とを織り交ぜて、主題である表現力を高めることと、社会や文化とのかかわりに活用することが同時に学べるような授業を示したい。対象学年が2学年であるので、中学校で積み上げた基礎力を活かした授業を提案したい。

第2学年 音楽科学習指導案

日 時 平成27年11月14日（土曜日）第2校時 11：25～12：15
対 象 東京学芸大学附属世田谷中学校 第2学年B組 39名
授業者 音楽科教諭 原口 直
場 所 音楽室

1. 題材名 社会を動かす歌の特徴を知り、文化・歴史と関連付けて鑑賞しよう。

2. 題材の目標

- (1) 歌詞の内容や曲に込められた思いを、主体的にとらえ表現する活動に取り組む。
- (2) 音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成からそれぞれ特徴をとらえて知覚し、文化的・歴史的な背景との関連を考えられる。

3. 題材の評価規準

	〈視点1〉 音楽への関心・意欲・態度	〈視点4〉 鑑賞の能力
題材の評価規準	歌詞の内容や曲に込められた思いをとらえる活動に、主体的に取り組む。	音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成からそれぞれの曲に応じた特徴をとらえて知覚し、文化的・歴史的な背景との関連を考えられる。

〈視点2〉音楽表現の技能および〈視点3〉音楽表現の創意工夫はこの題材では評価しない。

4. 生徒の実態

学級全体の雰囲気はとても明るく、男女の仲も良い。行事や教科など分野ごとにリーダーとなる生徒を中心に活動し、お互いに疑問を投げかけたり、問題を提起したりできる。また、それに対して素直に答えることができる。しかし、楽しさが先行し規律が乱れることがあり、指導によって直せるが継続性がない。日常生活で聴く音楽については、特定の生徒以外はあまり話題にならない。

音楽科の授業に関して、歌唱では男女関わらず声を出すことに抵抗がなく、学年の中では突出して声量が大きな学級であり、10月中旬の合唱コンクールにおいて学年の金賞を獲得し、自信をつけた。鑑賞においては、1年生から音楽を形づくっている要素を意識して聴くことを習慣づけており、すでに用語を理解し正しく使える。1学期に『交響曲第5番ハ短調』でスコアを見て、各楽器やパートのテクスチャを理解して聴くことができた。

また、言葉での表現について、国語や社会、理科などの学習や日常的な読書から言葉の豊富さ、多角的なとらえ方、客観的な見方に長けていると感じている。

5. 題材設定の理由

本教材は学習指導要領との関連は下記の通りであり、これらをもとに設定する。

B鑑賞

(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を指導する。

イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して、鑑賞すること。

[共通事項] 音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成のいずれか

6. 教材名と教材について

教材名	教材について
We Are The World ※授業では1985年に発売された曲を使用する。	作詞・作曲 マイケル・ジャクソン、ライオネル・リッチー 1985年にアメリカで発売された歌で、著名な歌手45名がアフリカ飢餓救済のために参加したチャリティーソングである。2010年にはハイチ地震による被災者支援のため、再レコーディングを行い、iTunesやYouTubeで広められた。
民衆の歌 (『レ・ミゼラブル』より) ※授業では和訳された曲を使用する。	作詞 アラン・ブーブリル (フランス語版歌詞) ハーバート・クレツマー (英語版翻案) 作曲 クロード・ミシェル・シェーンベルク 訳詞 岩谷時子 ヴィクトル・ユーゴーの同名小説を原作としたミュージカルで、1985年ロンドンで初演された。『民衆の歌』は不公正な社会をただし自由で平等な社会の実現を目指す学生が、革命を決意して歌う歌である。
Happy Christmas (War Is Over)	作詞・作曲 ジョン・レノン&オノ・ヨーコ 1971年にアメリカと日本で、1972年にイギリスで発売されたクリスマスソングである。「War is over if you want it.」という歌詞が含まれ、公式映像には戦争や飢餓で苦しむ人々の様子が映し出されている。近年も、国内外で多くの歌手がカバーしている。
花は咲く	作詞 岩井俊二 作曲 菅野よう子 2012年に発表され、NHK東日本大震災プロジェクトのテーマソングとして使用されている。岩手県・宮城県・福島県出身の歌手など36名が東日本大震災の被災者支援のため、制作されたチャリティーソングである。

7. 指導と評価の計画 (全1時間)

	○学習内容 ・学習活動	・指導上の留意点 ◇評価
導入 10分	○既習曲『夏の思い出』を歌う。 ・曲を作った人の意図を考える。 ○「本日のOverture」(短い鑑賞曲の名称)を行う。 ・男女それぞれ5人班になり、分担された1曲を鑑賞する。(男4班・女4班で1班につき1曲を男女それぞれに与える。) ・個人の意見を書いた後、班員の意見をまとめる。	・既習事項の音楽を形づくっている要素の復習をする。 ◇曲の特徴をとらえようとしているか。 ◇複数人の意見をまとめようとしているか。
展開 20分	○全体で曲を鑑賞する。 ・班の代表者1名が分担された曲について、特徴を説明する。 (男子説明1分→女子説明1分→鑑賞3分)	◇各班が述べている特徴を鑑賞に活かしているか。 ・鑑賞は途中で止める場合もある。(1番のみ、コーダなしなど適宜判断する。)
5分	○曲の解説を聞く。 ・4曲の共通する社会的な背景を知る。 ・ワークシートに要旨をまとめる。	◇適切に言葉で表現しているか。
10分	○なぜ、これらの曲が社会的に影響力を持つのかを音楽を形づくっている要素から知覚する。 ・班で話し合い、意見をまとめる。 ・代表者が発表する。	・1曲だけでなく、複数曲に共通する点を考えさせるよう促す。

まとめ 5分	○音楽を文化・歴史と関連付けて考える。 ・他の曲の紹介をする。 ・ワークシートに考えをまとめる。	
-----------	--	--

(学習指導案は以上。)

6. 成果

まず、授業展開については班ごとに曲を鑑賞する場面で、場所を分けて移動させたため、普段は一度で鑑賞できていたところを複数回聴く班が出て、時間がおしてしまった。その結果、全体で4曲を聴く場面で十分な鑑賞をできなかった。

また、教材の選び方について『民衆の歌』とそれ以外の3曲の持つ役割の違いを研究協議において指摘を受けた。『民衆の歌』は劇中の曲として作られたものを、聴衆が独自に解釈を広げて社会を動かす場面で活用している。他の3曲はもともとチャリティーや反戦、復興を目的として作られたものである。このように作られた目的の違いがある曲を、並列に取り上げるのはどうかとの意見をいただいた。

全体として生徒は音楽にこめられているメッセージが歌詞だけでなく、覚えやすい旋律、高揚させるようなリズムや強弱、複数人の声や音色が重なるテクスチャ、反復を用いている構成に気づき、発表することができた。

7. 今後の課題

教材については常に社会の動きを見ながら、その時に合った曲を適切に偏りなく選びたい。また、同じように「社会を動かす」役割を持つ音楽が、生徒の身近な生活の中になにかに結びつける展開も考えられる。例えば、経済活動に用いられる音楽（購買意欲をかきたてるCMソングや商業施設のBGM、企業を象徴する曲等）である。今後も音楽が身近にあり、それが意図を持っていることを考えさせたい。